

伝道のこころ

—エステラ・フィンチと黒田惟信の伝道—

海野 涼子

日本のプロテスタント史上の中でもキリスト教界に於いて、特に軍隊には宗教、特にキリスト教は育たないと定説のように言われていた頃、明確に軍人伝道を唯一の目的とし、軍人伝道こそ最も有望なりとして35年間、独特の使命に終始した軍人伝道がここ戦時下の神奈川県横須賀に於いて、明治時代のある時期になされていた。それが当時「陸海軍人伝道義会」と言われ多くの軍人が出入りしていた教会である。元教文館社長の中村義治氏も曾て機関学校時代にその頃のクリスチャン教官から導かれたことを回想して「キリスト者として神を愛し、国を愛し、隣人を愛する精神をマザーと黒田両師から叩き込まれ、誠実に生徒の訓育に当たったボーイズ出身教官」と言っておられた。そして伝道義会が35年間に横須賀海軍機関学校にもたらしたクリスチャンの数は卒業生数の54%に当たり、これは驚くべき数字ではないかと。更に「両先生の肉親にも勝る愛情、温かく優しい思いやりは、ボーイズたちの心を捉え、やがて生徒かけての信仰の交わりに発展していったのです。」とも言われた。黒田が発表した満30周年記念日の報告によれば、一般市民を含む来会者は合わせて約19万人で30年間に約1,000人救われたであろうとされている。何故これほどまでに多くの軍人がクリスチャンになることが出来たのであろうか。その背景には、一人の米国女性宣教師の滅私奉公の働きと、それを支えた牧師の陰の協力があつた。

エステラ・アイダ・フィンチは1869年(明治2)米国ウィスコンシン州、サン・プレイリーという小さな町に父ジョン、母アンヌの三女として生まれた。幼くして孤児となったがその詳細は不明である。20才の頃ニューヨークの教会で働きながら神学校への入学を志していた時、大富豪に見初められ養女となり、アルバートB. シンプソン博士が創設した北米初の神学校、ミッションナリー・トレーニング・スクール(現在のナイアック・カレッジ)に入学。

3年後に卒業、約一年間のインディアナ州での研修を終え、日本伝道を志し、1893年(明治26)超教派宣教師として24才で来日した。しかも養父の反対を押し切つての来航だったという。姫路を初めとして、東京、新潟と約5年に及ぶ懸命の伝道が続けていたが、やがて伝道に対する失望のかげりが見え始める。「日本人はキリスト教の思想は受入れられるが、キリストの贖罪が理解できず、改心が見られない国民である」との結論に達し、もはや日本伝道を諦めて帰国の準備を進めていた時、たまたま巡回伝道に来ていた横須賀基督教会の黒田牧師と出逢い、この出逢いによって黒田と話を交わすうちフィンチは己の偏見を悟り、黒田の「軍人には軍人の教会が必要である」との持論に賛同、再び日本伝道の意欲を燃え立たせ、この時陸海軍人伝道義会が誕生したと伝えられる。日本での再会を約束してフィンチは一旦米国に帰国の途に着く。

三浦半島の海辺に位置する横須賀の町は日本で最初の軍港の町として明治初期から知られていた。それまで漁村に過ぎなかった横須賀は、そこを中心として急激に発展し始めた。明治17年には横浜にあった東海鎮守府が横須賀に移り、横須賀に海軍鎮守府が置かれ、海軍の職工や退役軍人が住むようになった。その軍港にほど近い場所にあった横須賀キリスト教会に第6代目の牧師として赴任した黒田牧師にとって最も驚いたことは、町に居留する軍人の数の多さであった。その頃の国内情勢はどうであったか。日清戦争が1894年に始まり日本は勝利するが、世界情勢は激動の日々を迎えていた。黒田と出逢った一年後、フィンチは黒田との約束を守って再来日した。そして1899年(明治32)横須賀若松町にフィンチを会長、黒田を主任として軍人の為の教会、「陸海軍人伝道義会」が設立された。以下「伝道義会」と略す。「伝道義会」は何れの伝道協会にも属さず、自給独立伝道機関として主に軍人を対象として発足した。礼拝、聖書講義は主として黒田が受け持ちフィンチはその運営面に心砕き、世話役として裏方に徹し、義会の資金を得るための寄付を仰ぐことに一心を注い

だ。

そのように一切の費用はフィンチの米国の友人、その他の浄財寄附によって賄われ、フィンチは義会運営の責任を一身に負った。当時の日本は日清戦争に勝ち、国内は戦勝気分には浸っていた時代でもあった。宣教師といえばスパイと見なす風潮にあって、フィンチは多くの困難な条件を克服せねばならなかった。伝道義会の存在は、明治時代に起った日清戦争、日露戦争など日本の激動時代において、軍人という職業にあった人々にキリスト教の種を蒔くという働きの中で、そこに入り出る軍人にとって、そこは宣教集会のみでなく、独身者の宿泊、或いは家族と共に逗留することも可能な設備があり、将校、下士官を問わず、礼拝、聖書研究等の後、引き続き食事をしたり、家族的な（アットホームな）雰囲気を楽しむことが出来るなど他に類を見ない独特な伝道機関であったため、多数の軍人が来会した。その伝道は広く浅くよりは、狭くとも深く、一人の魂を重んじて愛と祈りをもって仕え導いたという。集会数は年間460回にも及び、まさに骨身を削るほどの献身的な伝道であったことが窺える。これは数を選ばず個人集中であったことだ。伝道義会の入口はいつも開かれており、フィンチは日々訪れて来る生徒らをボーイズと愛称し生徒らはフィンチを「マザー」と呼んで敬愛し、よき相談相手になったという。このような献身的な伝道はやがて軍人達の心を捉え、多くの軍人達が入り出るようになり、また多くのクリスチャンを輩出する。伝道義会はフィンチが元来超教派宣教師であって、内村鑑三との交わりもあったことから「日本武士道的キリスト教主義の聖書研究会」だったとも聞く。フィンチは「アメリカ人である自分が日本の軍人に伝道するためには「日本人には日本人の如くに接すること」を目指した。先ず日本語を勉強し、日本語を話すだけでなく、日本の歴史、風俗、文化についても学んだ。書道も学び、この点においても第一人者であった。また日本の史跡を探索、詩歌や和歌、山家集にも親しみ勉強を重ねている。また非常に筆まめな人であったこと。フィンチが祈りと心血をこめて絶えず送り続けられた手紙は、船や陸上、到るところにある者達をどれほど力づけたことであろうか。ボーイズ達には青年らしさを求め、只閉じこもって聖書を開いているだけでなく、よく柔道、剣道の奨励をした。そのために伝道義会にはマザーの要望によって、小さな武道場（柔剣道場）が作られ、ボーイズ達の稽古を喜んでいたという。

日露戦争後、日本と米国の関係が悪くなり始めた。日本の満州経営が米国の期待した通りに進まなかったためだ。こうした折、フィンチは1909年（明治42）1月11日、40才の時、日本に帰化して星田光代と改名した。帰化した理由については日本情勢の中、「ボーイズ達が苦しんで戦っているのに、どうして私だけが平気でいられようか」との思いがあったと当時のボーイズの一人は語った。黒田もその記述の中で「日米関係が不穏な時代となった頃、マザーはそのことを憂慮されて、アメリカの友人、援助者の反対を押し切って日本国民となった。爾来アメリカからの援助が少なくなってしまったが、それにも拘わらず、この決心を以て貫き“ただ唯一神のもと、全人類みな兄弟なり、同胞なり”との信仰に徹した。マザーは全身全霊を以て日本国のために最大の愛をささげた米国人であった。」と。内村鑑三はそれ以後「ホシダの小母さん」と敬意を込めて呼んだ。

このように日本軍人伝道に尽した星田光代は、かねてから持病の心臓病があり、ハワイでの療養中、1923年9月に関東大震災が起る。幸い地震は免れるが、その後や・健康を取戻したので、翌年横須賀に戻ってきて罹災者の慰問をしたりしていたが、相変わらず心臓病は思わしくなく、遂に1924年6月16日、25年間にわたる軍人伝道の生涯を閉じた。享年56であった。マザーが亡くなって、伝道義会は引き続き黒田牧師によって運営されたが、教勢は以前にも増したという。マザー亡き後10年経った1935年（昭和10）には黒田牧師も病で死去。享年69。伝道義会は後を継ぐ適任者がなかったため、翌年（昭和11年）に解散した。しかし、星田・黒田両師によって蒔かれた信仰の種は大きく成長し、生徒達は候補生となり、士官となり、教官となって後輩を導き、兵隊は下士官となって、家族を持って家族、友人を導いた。ボーイズの一人、後の太田少将は「星田・黒田先生によって導かれたもの数知れず、己の家族、友人、後輩、色々な人々に影響を残した。」と語った。最後までイエス・キリストの愛を貫き通し、日本と日本の人々を心から愛し、その一生を日本伝道に捧げた星田光代。彼女の墓碑には黒田牧師による次のような碑文が刻まれている。「ああ、先生のごときは我が国軍人の為にその青春を棄て、国籍を棄て、遂にその生命そのものをさえ棄てた。彼女は死んだが、信仰によって今なお語っている。（ヘブル11：4）

伝道義会はその後「コルネリオ会」として受け

継がれたが、現在は防衛関係キリスト者の会として続いている。何故これほどまでに影響を与えるほどの軍人伝道を成し遂げられたのかを思う時、それはフィンチほどの女性宣教師が日本に遣わされたからに他ならない。そこにはアメリカ社会が育てた1800年代のキリスト教という一つの大きな土壌が生んだ産物でもあり、背景があった。そこで逞しい、最も厳しいキリスト教精神を受けて育った19世紀アメリカの一女性としてのロールモデルをフィンチに重ねて見る事ができたと言ってよいのではないか。それが私の見解である。そしてこのような人物が日本に与えた影響力は何にもまして大きいと思う。それは宣教師という一つの職業を通して、アメリカのウーマンフッドのフェミニズムがもたらしたアメリカ婦人の強烈な精神力とたくましさ、そしてその後には於ける影響を受けた日本女性の活躍を通して日本のウーマンフッドもまたそこに見ることができた思いである。最後にこのことを私自身が学ぶきっかけとなった素晴らしい参考文献「アメリカ婦人宣教師、来日の背景とその影響、小檜山ルイ著、東京大学出版会」を通してフィンチのような殆ど資料を持たない無名の女性宣教師が生まれた背景を知る上で、検証できたことは心から感謝の念に絶えない。この機会を借りて御礼申し上げる次第である。

宣教師の印刷と出版—中国から日本へ—

宮坂 弥代生

はじめに

15世紀にグーテンベルクが金属活字による活版印刷技術を発明し、この技術がプロテスタント信仰を支えたことは周知の事実である。しかしながら、近代に東洋へその技術を伝えたのがプロテスタント宣教師であったという事実はあまり知られていない。グーテンベルク以後、西洋で用いられた活版印刷技術は、プロテスタント伝道団や宣教師が伝道地に印刷所を開設したことにより、東洋でも実用されることになったのである。

木版印刷と活版印刷—東洋と西洋

印刷とは、版を用いて同一の物を大量に作る技術である。現在私たちが日本で目にする印刷物の多くは、オフセット印刷という平版印刷（平らな版による印刷）の一種で印刷されているが、東洋では19世紀まで木版印刷が使用されていた。

木版印刷とは凸版印刷の一種で、原稿通りに木を彫った版（版木）を印刷するもので、7世紀頃に中国で発明されたといわれている。漢字という数の多い文字を使う東洋では、木版印刷が活版印刷より簡便な方法であった。

活版印刷も凸版印刷の一種である。文字を反転し浮き彫りにした活字を一字ずつ原稿通りに拾い、組んで版にして印刷する。最も古い使用は、11世紀に中国の畢昇という人物によるものだ。15世紀にはドイツのグーテンベルクが、合金で活字を鑄造し、手引き（手動）印刷機で印刷するシステムを発明し、それ以降、西洋ではこの方法による活版印刷が用いられ、技術は近代まで継承された。

印刷と伝道—東洋で直面した問題

19世紀、プロテスタントの各教派は海外伝道に力を注ぎ、伝道地に開設した印刷所（ミッション・プレス／mission press）で、伝道に用いる現地語の印刷物を印刷した。漢字活字は16世紀頃からヨーロッパで作成され、東洋学関係の書籍に使われていたが、それらの漢字を中国人は、「洋相」（醜態、滑稽な様という意味）と評した。そのためミッション・プレスにかかわった欧米の技術者や宣教師は、複雑な筆画を整え、字形を洗練する必要があった。

彼らにとって幸運だったのは、中国に「明朝体」という印刷書体があったことだった。明朝体は横画が細く、止めに三角の「ウロコ」があり縦画が太い書体である。もともと中国では筆で書いた楷書を版木に彫っていたが、明朝体は、彫り師がより成形しやすく速く版木を彫るために成立した。そのため欧米人にもデザインしやすい書体であったのか、彼らは中国人や日本人の協力も得ながら、明朝体で漢字活字を作成し、字形を美しく整えていったのである。

ミッション・プレス「美華書館」とウィリアム・ガンブル

中国における代表的なミッション・プレスは、上海に開設されたロンドン伝道会の墨海書館とアメリカ長老会的美華書館である。特に美華書館は、日本でも『和英語林集成』が印刷された印刷所として知られているが、何より中国・日本への活版印刷技術の伝播に大きな役割を果たした。現在中国における最も大きな出版社のひとつである商務印書館は、美華書館で働いていた中国人が興したものである。また日本における近代活版印刷業の嚆矢である新町活版所を開いた本木昌造は、美華書館

の責任者ウィリアム・ガンブル (William Gamble) から1869年に長崎で印刷技術を学んでいる。

このガンブルの長崎招聘はフルベッキの紹介で実現し、ガンブル指導の下、本木は電胎法(鍍金技術)で、漢字・欧文・仮名活字の母型を3セット作成し、和英辞典を印刷したという。ガンブルは、長老会の記録では身分は宣教師ではなく印刷職人であるが、長崎滞在中は日本のキリスト教徒にも関心を持っていた。*Chinese Recorder* (April 1870)の記事“Persecution of Christians in Japan”はガンブルが寄稿した記事で、スタウト (H. Stout) とともに浦上で目撃したキリスト教徒迫害の状況が記されている。

来日宣教師 ヘボンとフルベッキ

ヘボン (J. C. Hepburn) とフルベッキ (G. H. F. Verbeck) が、美華書館でかな活字の作成や書籍の印刷にかかわっていたことは、彼らの書簡から明らかである。特にヘボンが『和英語林集成』印刷のために岸田吟香とともに上海へ行き、美華書館でその印刷に助力したことは、すでに英学史や印刷史研究の中でも取り上げられてきた。

一方、印刷史の中でフルベッキはこれまで、ガンブル招聘の仲介者として言及されるにとどまってきたが、書簡には以下のような記述がある。

「長老ミッションの印刷局長のガンブル氏が日本字の活字の一そろいを用意しています。ガンブル氏はこのためにわたしに助力をもとめているので、わたしも同氏に助力をおしみません。これらの活字は将来わたしたちのために重要な価値となりましょう。」(1863年5月22日上海)、「ガンブル氏と一緒に日本文字のかなの活字を用意しております。(中略)ガンブル氏が暇の折に、わたしは彼を先生としてたくさん仕事をしました。」(1863年6月20日上海)——以上、高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』教文館(1978年)より引用。

フルベッキは1860年に米国聖公会のリギンス (J. Liggins) から、ミッション・プレスで印刷された書籍を日本で頒布する役割を引き継いでおり、ヘボンより早い時期から美華書館やガンブルと関係があった。そしてこのように美華書館の活字製作にも協力していたのである。

おわりに

以上のように、東洋への活版印刷技術の伝播にプロテスタント宣教師が果たした役割は大きい。日本印刷史の研究には、欧米の活字制作、中国を中

心としたミッション・プレスと文書伝道、来日宣教師の活動を総合的研究することが必要なのである。

服部綾雄とキリスト教

—ヘボン塾からプリンストン神学校を中心に—

権田 益美

はしがき

1859(安政6)年10月17日、アメリカ長老教会海外伝道局より派遣された医療宣教師ジェームズ・カーチス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn, 1815-1911, 本稿ではヘボンと称す) は、妻クララ・メアリー・ヘップバーン (Clara Mary Hepburn, 1818-1906, 本稿ではクララと称す) と共に、神奈川に到着した。禁教下の日本において、無料奉仕での医療活動、英語教育にも力を入れた。クララは、アメリカでの教師経験を活かし1863(文久3)年の秋には、ヘボン塾を開設した。塾生の中には、得意の英語を活かし明治期に政治家や実業家として活躍するものもいた。1873(明治6)年2月、キリスト教禁止の高札廃止により、ヘボン塾はその様相を変えた。塾生の中には洗礼を受け牧師をめざすものも出てきた。そうした塾生の一人に服部綾雄がいた。彼はヘボン塾にはじまり、プリンストン神学校 (Princeton Theological Seminary) に留学するまでに研鑽を積んだ。

1. 服部綾雄と沼津兵学校付属小学校

服部綾雄は、1862(文久2)年12月、駿河国沼津藩の城下に生まれる。父は沼津藩主水野出羽守の重役服部純、母は縫子であった。1868(明治元)年には、水野侯移封に伴い、服部家も上総国菊間に移った。翌年、服部綾雄は静岡藩が開設した沼津兵学校附属小学校に入学、そのカリキュラムには特徴があり、素讀、學書、算術、地理、體操、水練、講釋聽聞等を取り入れ、沼津兵学校への入学の準備機関としての役割を担っていた。附属小学校には7~8歳ぐらいから入学が許可されていたが、生徒の在籍年齢には特に制限はなかった。但し、兵学校に入学を志願する場合18歳までに修学することが求められていた。服部綾雄は、1869年(明治2)年の時点で、数え年8歳で、沼津兵学校附属小学校の入学条件は満たしていたが、年長者の多い中での学習だったので、彼なりの気苦労を要したものと思われる。

2. 服部綾雄のヘボン塾

服部綾雄がヘボン塾に入塾したのは、10歳の時

といわれている。佐波亘編『植村正久とその時代』には、ヘボン塾における服部綾雄についての記載がある。「服部綾雄氏が十歳で沼津を出で、横濱に参りヘボン塾に托せられし時は、まだ女学生と一緒に勉強したものであったと、後に服部氏自ら述懐してゐる。」と。そうした論述を前提に、1862（文久2）年生まれの服部綾雄が数え年で10歳となる1871（明治4）年の入塾となると、その頃にヘボン夫妻の指導が受けられたのかどうか問題になる。1871（明治4）年11月から1872（明治5）年7月まで、ヘボン夫妻は『和英語林集成』第2版印刷のため上海滞在中であった。その間の服部綾雄の教育担当者については今後の研究課題とする。

服部綾雄が入塾した頃、1871（明治4）年8月23日付のヘボンのラウリー博士宛ての書簡には、武士階級の変化についての記述がある。日本の全人口の10分の1にも及ぶ武士階級は生計を得るために自己の労力に頼らなければならなくなったことが記されている。そうしたヘボンの書簡を見てもわかるように、服部綾雄のような幕臣の子供たちの教育も制約を受けかねない状況で、ヘボン塾が彼を受け入れたことの意味は大きい。それも、ヘボン夫妻の日本不在中に、受け入れたことは、「ヘボン夫妻の優秀な青年を育てていきたい」という思いが、ヘボン塾の教育理念として醸成されていたことを意味する。

ヘボン夫妻は、1872（明治5）年10月から1年余り再び日本を離れた。その間、1872年6月に横浜に派遣されたH.ルーミス（Henry Loomis, 1839-1920, 以下ルーミスと称す）とその妻ジェーン（Jane Loomis, 1845-1920）が、ヘボン夫妻の留守宅を預かっていた。ルーミスは服部綾雄が、信仰に向けて大きな影響を受けた宣教師といえる。ルーミスは1839年に、ニューヨーク州（New York）バーリントン（Burlington）生まれ、1859年にクリントン（Clinton）にあるハミルトン大学（Hamilton College）に入学したが、学生生活中に南北戦争が勃発、義勇兵として北軍に志願、戦功を収めた。戦後、大学に戻り1866年に卒業、同年秋には、オーバン神学校（Auburn Theological Seminary）に進学、卒業後は宣教師として活躍した。1874（明治7）年9月13日には服部綾雄等7名の日本人がルーミスより洗礼を受けた。

3. 服部綾雄と築地大学校

1877（明治10）年10月、日本基督一致教会が設立された。教会への教育者の養成機関として、築地居留地に東京一致神学校が開設されることに

なった。この神学校へより良い人材を育て送り込む教育機関が同地区に必要となった。既にその頃、横浜から東京へ教育の中心が移っていったこともあり、J. C. バラ（John Craig Ballagh, 1842-1920）は横浜から築地に転居することとなった。1880（明治13）年4月26日に、バラ学校からの学生を含め入学生45名の築地明石町にアメリカ長老派の男子英学校、築地大学校（Tsukiji College）が開校した。J. C. バラが校長を務め、服部綾雄と石本三十郎（1862-1896）が事務を担当した。1877（明治10）年来日のトマス・T. アレキサンダー（Thomas Theron Alexander, 1850-1902）、1875（明治8）年来日の、W.インブリー（William Imbrie, 1845-1928）とその妻エリザベス（Elizabeth D. Imbrie, 1845-1931）も専任教師として迎えられた。W.インブリーの父のC.インブリー（Charles Kisselman Imbrie, 1814-1891）はニュージャージー州の第一長老教会の牧師であった。プリンストン大学 Princeton University（当時は College of New Jersey）、プリンストン神学校を卒業した。W.インブリーはコロンビア大学（Columbia College）プリンストン大学、プリンストン神学校でも学んだ。卒業後ニュージャージー州で牧師となり、日本への赴任は、1875（明治8）年9月であった。

築地大学校は、英学科と漢学二学科制で予科準備のための級外、予科三年、本科三年という体制で、予科のカリキュラムとして、英語（会話・訳読）歴史（万国史および各国史）地理、代数、幾何を、本科では英文学等の課目が取り入れられた。講義は原則として英語で行われ、キリスト教関係の課目が中心であった。1882（明治15）年6月には、第一回卒業式が執り行われた。服部綾雄、石本三十郎も卒業した。その翌年9月、築地大学校は横浜の先志学校と合併し、校名を東京一致英和学校と改め、服部綾雄は、幹事として学校の経営、実務を担当した。1884（明治17）年になると、東京英和一致学校の予科を独立させた形で神田に英和予備校を設置、服部綾雄は校長に就任、1886（明治19）年6月には、東京一致神学校、東京一致英和学校、英和予備校が合併、名称を明治学院とした。神学部と普通部が創設され、服部綾雄は英語の担当となった。

4. 服部綾雄とプリンストン神学校

1888（明治21）年から1889（明治22）年にかけて一年間、服部綾雄は、より深いキリスト教理解のために、アメリカ、ニュージャージー州（New Jersey）プリンストンにあるプリンストン神学校に留学する機会を得た。服部綾雄が学んだカリキュ

ラム、教授陣、学生の区分等に関する史料 (*Catalogues of the Theological Seminary*, Princeton, N, J 1888-1889.) に基づくと、1888年から1889年の在校生は、正規課程生第一学年49名、第二学年56名、第三学年53名、専門研究科生9名、特別研究生 (Special Students) 2名に区分でき、学生総数169名を数えた。1812年の創設当時の学生数は3名であったので、70年余りの歴史を経て宣教師を養成する教育機関として着実に発展してきたといえる。史料の中で、特別研究生の欄に服部綾雄の名前を確認、Name.としてAyao Hattori¹と、Residence.としてTokyo, Japan. と、College.としてMeiji Gaku-in, Graduated 1882.と記載されていた。Ayao Hattori¹と名前の上に1と記載されているが、正規課程1年 (First Year) のことで服部綾雄は特別研究生として、正規課程1年の授業に出席していた。プリンストン神学校正規課程1年の主要カリキュラムは旧約聖書概論、ヘブライ語、新約聖書概論、教会神学、説教法等があげられる。次に服部綾雄の学歴に表記であるが、史料には、1882(明治15)年明治学院卒との記載がある。実際に、明治学院と称したのは1887(明治20)年からで、1882(明治15)年の時点では、築地大学校であった。築地大学校は後の明治学院ということで、1888(明治21)年の段階での大学名を記載したと考えられる。カリキュラムには、副専攻制度もあり、その中のCourse in Ethics, and the History English Ethicsの総受講生は56名、Special Studentsとして、服部綾雄の名前が掲載されている。服部綾雄の副専攻はHistory of English Etics「宗教思想史」の担当はフランシス・ランドリー・パットン (Francis Landey Patton. 1843-1932)、以下F.パットンと称す)である。F.パットンはイギリス人、トロント大学 (University of Toronto) とプリンストン神学校で研鑽を積んだ。1888年、プリンストン大学の学長に就任した。ちょうどその年に、服部綾雄はプリンストン神学校で講義を受ける機会を得た。ヘボン塾入塾から、僅か17年で単身留学するまでにいたった服部綾雄は、大勢の英語圏出身の上級生に囲まれ何を学び何を感じたのであろうか。

むすび

服部綾雄は、ヘボン塾からプリンストン神学校へとその学びを深めた。留学経験を活かし、帰国後は、教会の指導者として活躍が期待された。1892(明治25)年に、日本基督教会より按手礼を受けて東京牛込教会(牛込弘方町)の牧師となるが、その後、牧師を辞し教職者となる。1894(明治27)

年に富山県立中学教師となり、1897(明治30)年1月付で校長に任命された。翌年4月には岡山県立岡山中学校の校長に任命された。服部綾雄の指導科目は、英語教育、キリスト教教育であったが、そうした教科が当時の県立旧制中学校でどのように位置づけられてきたかは今後の研究課題である。考察を深めていきたい。

1902(明治35)年3月以降の服部綾雄の動向であるが、アメリカのシアトル (Seattle) 在住の古屋政次郎 (1862-1938) の招聘を受け、渡米した。そこでアメリカにおける日本人の移民問題にふれ、その課題が生涯にわたる活動の原点になっている。帰国後、1908(明治41)年、衆議院議員となり、移民問題を解決すべく活動を続けた。犬養毅らと国民党を結成し、党の運営にも関与した。1914(大正3)年5月にカルフォルニアの排日問題解決のため渡米し、1915(大正4)年4月1日渡航先のサンフランシスコでその生涯を閉じた。

服部綾雄の後半の活動について、特に移民問題に焦点をあて、研究を進めていきたい。

賀川ハルと横浜

岩田 三枝子

1. 賀川ハル(1888-1982)生涯概略

賀川豊彦(1888~1960)の妻である賀川ハルは、豊彦と同じ1888年に生まれた。14歳の時に1年間の女中奉公を経験し、16歳から25歳まで、クリスチャンの伯父・村岡平吉が経営する「福音印刷」に女工として勤務した。24歳でキリスト教に入信し、25歳で豊彦と結婚した後、生涯、夫と共に市民社会のための活動に携わる。1914年から1917年まで共立女子神学校(現・東京基督教大学の共立基督教研究所)に学んだ。また女性労働者の人権保護を目的とした婦人運動である覚醒婦人協会(1921~23)の中心発起人ともなった。一男二女の3人の子供たちの母親であり、執筆活動、講演活動なども行い、1960年の豊彦の没後も、ハルは夫の残した事業を引き継ぎ、94歳で亡くなった。

2. ハル幼少期の地域環境

ハルは、横須賀で父・芝房吉と母・ムラの長女として生まれる。横須賀の港が自宅から1キロ以内の場所にあり、1883年にはカトリックの聖ルイ教会が中里町に移転されるなど、異文化やキリスト教の雰囲気幼少期のハルのごく身近にあったことが想像できる。その後、父親がハルの伯父である村岡平

吉の福音印刷合資会社（以下、合資会社）に勤務することとなったために一家は横浜に住み、ハルが16歳の時には、父親の合資会社神戸工場転勤に伴い神戸に転居するが、神戸の街中には坂が多く、山が港の間際まで迫る風景等、横須賀や横浜と神戸の風景は共通点も多い。関東から関西への転居により、文化や言葉の面では戸惑ったこともあっただろうが、生まれ育った町と重なる風景の中で、ハルの心が慰められることもあったのではないかと推察される。

3. 村岡平吉・はな

ハルにとって、最初にキリスト教信仰の影響を与えたのは伯父・伯母である村岡平吉・はな夫妻である。

(1) 村岡平吉

村岡平吉は、1852年、神奈川に生まれ、1876年、ハルの父親の房吉の姉・はなと結婚する。1883年、横浜住吉町教会（1892年に指路教会と改名）において、米国宣教師ノックスより洗礼を受けた。平吉は、1894年～1900年、および1904年～1922年の永眠までの期間に指路教会の長老として仕えており、平吉と教会との深い結びつきをみることができる。

平吉は1898年、聖書、讃美歌、聖公会の祈祷書、講壇用の大型聖書、トラクト等を印刷する合資会社を設立する。ハルと父親の房吉が勤務した神戸支店開設は1904年であり、房吉は支店開設直後の1904年5月から、そしてハルは同年10月から1913年3月まで勤務した。ハルは、合資会社で行われる勤務者向けの礼拝に出席したり、会社で印刷するキリスト教宣伝トラクトを読むなど、キリスト教との接触の機会が増える。

(2) 村岡はな

ハルの父親の姉であり、平吉の妻であるはなは、夫と同じ年に横浜住吉町教会（後の指路教会）において洗礼を受ける。

この伯母はなについて、熱心な信者であり、夫や子供、さらに隣人に接して良い人であった、とハルは記す。ハルは当初はキリスト教の信仰的側面には無関心であったが、伯母の人柄を通して、キリスト教に対して好印象を抱いていたといっている。

しかしハルが21歳の秋、この伯母は腎臓病のため亡くなる。この時ハルは、「基督教は神は愛だと教へ、神に心熱い伯母は何故あの病苦が有つたのだろう」¹と葛藤を覚えるが、伯母の死を通して、神の存在がハルにとって印象付けられることとなり、その後の豊彦が語るキリスト教の神を受け入れる道備えとなったのではないかと推察される。ハルの内面的変化を示しているのが、伯母の死後の出来事としての次の記述

である。「暗い空を見上げては燦爛と輝く星を見ると地上の人の生活とはかけ離れて、神々しさを思ふのである。自分にはこれだと指摘し得ないが何かこの世の中には私達人類の司配者なるものがあると思へる。²」

伯母の死を契機として、現世を超えた永遠の世界に対する視点が開かれ、宗教心が芽生えとも表現できるだろう。

(3) 社会の一員として生きるキリスト者の姿

以上の伯父・伯母との交流により、特定の教団・教派には限定されない信仰、また一市民として社会に生きるキリスト者の姿を学んだのではないかと推察される。このことが、後にハルが教団・教派、また場合によっては宗教の枠組みを超えて諸社会活動のために連帯することができた姿勢にもつながったのではないかと推察される。

4. 共立女子神学校

ハルが1914年から1917年まで在学した共立女子神学校は、ハルが10代の頃行き来した太田町5丁目にある村岡家からは1.5キロほどの距離であり、ハルにとってなじみのある場所だったことだろう。また、村岡家が通う指路教会牧師の毛利官治は共立女子神学校の教授でもあり、ハルも在学中は指路教会に通っている。

(1) 歴史

共立女子神学校は1881年、偕成伝道女学校として設立された。米国婦人一致外国伝道協会（Women's Union Missionary Society : WUMS）を通して、1871年日本への派遣宣教師として来日したルイーズ・H・ピアソン（Louise Henrietta Pierson, 1832～1899）が1891年、偕成伝道女学校校長専任となった。1907年、偕成伝道女学校は共立女子神学校と改称した。

(2) カリキュラム

WUMS本部への年次報告等を統合すると、ハルの在籍した頃は、次のようなカリキュラムだったようである。

カリキュラムの一部

神学	旧約聖書、新約聖書、教会史、教理、キリスト教明証論、キリスト教伝道法、日曜学校の運営法、聖書朗読法
一般教養	日本文学、漢文、作文、音楽、裁縫、行儀作法、体操
社会活動	工場、孤児院、慈善病院、女子更生施設での活動
キリスト教伝道	家庭訪問、日曜学校、夏休みの福音伝道

ハルの日記にも、「教理が面白い」³や、「新約使

徒伝、教理、伝導法、体操、旧士師記⁴とある。また日記には、「工場」や「孤児院」に行く様子や、「午後家庭訪問に行く。自分は澤井姉とで八幡谷戸の貧人の家に行く」⁵と記録される。

このように、ハルが在学中の共立女子神学校のカリキュラムでは、聖書知識の他にも、実践的内容の教科が提供されていた。また、日曜学校といった直接的なキリスト教伝道の実践的働きに加えて、感化院や工場といったような市民社会の場に開かれた宣教活動は、ハルがすでに神戸のスラムで経験してきたものであり、ハルにとっても共感できる部分が多分にあっただろう。

(3) 共立女子神学校で出会った人々

スーザン・A・プラット (Susan A. Pratte) (1867～1955)

ハルが「ミスプラット」と記す校長のスーザン・A・プラットとハルは、晩年になるまで交流があった。プラットは1899年に偕成伝道女学校二代目校長として就任し、1937年に退職し、アメリカに帰国した。

ハルは1914年10月2日日記に「今日は校長プラットが誕生日である相だ。校長ハ西洋人の習か知らないが、非常に生徒を愛する。然しおかしき位短気なこともある。旧約を凡て暗□的に云はされるには一寸困る」⁶と記し、戸惑いつつも好感を持ってプラットを評価している。

それからおよそ40年後、1955年ハルが単独でアメリカ伝道旅行に赴いた際、ニューヨークでプラットを見舞っている。このハルの訪問から約4か月後、12月18日にプラットは88歳で亡くなった。

城戸順 (1878～1949)

ハルは日記で「教理が面白い」⁷と記しているが、この教理は、当時、城戸順が担当していた。

城戸は、1892年偕成伝道女学校に入学、1899年に同校を卒業、偕成伝道女学校の教員に就任し、1943年に退職している。さらに城戸は、共立女子神学校在職中、矯風会の活動に書記や支部長として関わっていた。また、指路教会では、1918年から1922年まで執事として、そして1932年から1941年までは長老として名が記録されている。

ハル在学当時は、城戸は30代の後半である。ハルよりも10歳ほど年長者である城戸の、堪能な語学力を用いての神学校の務めや女性に関わる活動、そして教会での責任などにも奮闘する姿に間近に触れ、女性としての働きという面からもハルは刺激を受けたかもしれない。

ハルは共立女子神学校在学時代に、宣教への熱意に溢れた超教派的な雰囲気のある学校内で過ごし、

さらに学校外でも教会や他団体との関係の中で、様々な新しい視野を広げたことだろう。

6. 最後に

賀川豊彦の思想や活動が見直され、現代の文脈において注目される際、豊彦と共に活動を担った妻・ハルの存在も貴重である。また、賀川夫妻によって築き上げられた公私におけるパートナーシップは、政治や経済の分野、さらに民間企業における女性の果たす役割や、家庭での男女のワーク・ライフ・バランスのあり方が再検討される今日、よき指針の一つとなりうると考える。さらに、グローバル化の波の中で多様な文化背景の人々との共生が進む状況において、賀川夫妻の示した多様な背景を持つ人々との協働の姿勢もまた現代の文脈において意義のあるものとなるだろう。

- 1 賀川はる子『女中奉公と女工生活』(1923年)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、39頁)
- 2 賀川はる子『女中奉公と女工生活』(1923年)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、40・41頁)
- 3 賀川ハル「1914年日記」(10月14日)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、189頁)
- 4 賀川ハル「1914年日記」(10月23日)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、191頁)
- 5 賀川ハル「1914年日記」(10月6日)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、188頁)
- 6 賀川ハル「1914年日記」(10月2日)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、188頁)
- 7 賀川ハル「1914年日記」(10月14日)(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、189頁)

大濱徹也先生を偲ぶ

原島 正



2019年2月9日逝去、81歳

大濱先生の逝去を朝の新聞で知ったときは、驚きでした。つい先日、横浜プロテスタント史研究会の例会で、私の隣の席に座っておられました。先生は北海道にお住まいですが、しばしば、上京されるのでしたので、再びお目にかかる機会があるとばかり思っていました。それだけに先生のご逝去は、突然のことで信じられない思いでした。

先生との出会いは、富士見町教会で開催されていた日本プロテスタント史研究会でした。先生のお

台風襲来

吉駒 明子

弟子さんたちに研究発表をさせてほしいとのご依頼で、研究会に出席されたときと記憶します。お弟子さんの発表の例会には必ず来られ発表後には、厳しく指導をされました。別のお弟子さんが、このようなときではなく、学内の研究会のときにおっしゃればよいのに、研究会のあとに言われたこと覚えています。先生はときとところを選ばず、言うべきは、言っておくということで、先生の熱心さの現れでした。まさしく歯に衣着せぬ辛辣な物言いでしたが、こうすべきであるとの指示があり、弟子思いの優しさを感じられました。そこに先生の魅力があり、多くのお弟子さんを育てられたことに敬意を持っていました。先生は、歴史学の優れた研究者であるだけでなく、良き教育者でした。

2001年3月に、先生が筑波大学を定年退職されたあと、北海道で生活されることになってからは、お目にかかる機会が無くなりましたが、先年、キリスト教史学会の全国大会が北星学園大学を会場に開催されることが決まったとき、先生に公開講演をお願いすることになり、久しぶりに“大濱節”を伺い、先生がお元気でお変わりなきことを知り、嬉しく思いました。

実は、先生とお目にかかる前、どのような会合であったかは、記憶はないのですが、新地書房の御仕事をされていたご尊父とご一緒するときがあり、その後、拙宅とそんなに遠くないところ、目黒区八雲のご自宅に来るようにとのお誘いがあり、応接室で若造の私に、出版にたいする思いを熱心に語ってくださいました。そしてしばらくして、ご子息の先生と初対面のときが与えられ、御尊父からお話を伺う機会があったことを申し上げました。先生は、私に好意を持たれたようで、先生が関わっておられた事典のいくつかの項目の執筆を書くように依頼されました。

先生には、たくさんのお著書がありますが、その一冊『明治キリスト教会史の研究』(1979)は、刊行当時に非常勤で教えていました農村伝道神学校の授業でテキストとして、丁寧に読ませて頂きました。受講された学生からは、教えられるところ多くあるとの感想があったことを記憶します。まことに残念ながら先生の讐咳に接することは、できなくなりました。しかし、先生のお書きになったものを読み、先生から今後も、学びたいと思っています。そして何よりも、熱心に育てられたお弟子さんたちが先生の学風を引き継ぎ、良い仕事をしてほしいです。それが先生の願いであり、先生への学恩にたいする応答であると思います。

大学院の修士課程に在学していた頃、先輩から大濱徹也先生の『明治キリスト教会史の研究』を紹介されました。「何でも書いてあるよ」と。ところがそれは、私になじんでいた故土肥昭夫先生らの同志社人文科学研究所の日本キリスト教史とは、かなり肌合いが異なるもので、とまどいました。

大濱先生に直接お目にかかったのは、富士見町教会でのプロテスタント史研究会だったように思います。『海老名弾正の政治思想』(1982年)出版後だったのかも知れません。同志社流には批判的と聞いていたので、オソルオソルでしたが、普通に相対していただきました。

自分の信仰のあり方も含めて、人々の足下を無視して、「民主化・平和主義」をあたかもキリスト教の特許であるかのように、声高に叫ぶ論調を大濱先生は毛嫌いされました。先生は無教会の大濱亮一氏のご子息だったから、私の植村研究をお送りするのもおっかなびっくりでした。でもそれは誤解でした。逆に、ガチガチの信仰者である父亮一への反抗とコンプレックスがあったかもしれません。『庶民のみた日清・日露戦争』を読むと、大濱先生がこのような時代と戦争とを課題として、奮闘された軌跡がよく分かります。『神港教会八〇年史』についても、ブルジョア教会、インテリ教会などというレッテル貼りなどはなさらず、教会が神戸という町で形成されていく様の描写を評価されました。

そういえば、豊川慎君の河井道の教育についての発表が終わるや、「どんな立派な家に住んで、どんな生活をしてたか知ってるのか!」との怒鳴り声が響きました。2016年北星学園でのキリスト教史学会でのことです。大濱先生はまるで台風のように駆け出しの研究者を襲われました。でも、そばでお話してみると、台風の日に入った時のように穏やかでした。「あんまりお酒飲むから、お風呂で沈んじゃった」と刀水社長の中村文江さんは嘆きます。「刀水をどうしたものか」と心配しながらの急逝でした。

大濱徹也先生を偲ぶ

岡部 一興

大濱先生は、日本プロテスタント史研究会の例

会で時たま会うぐらいで、特別親しい間柄ではありませんでした。身近に感じるようになったのは、1979年に『明治キリスト教教会史の研究』（吉川弘文館）を刊行されたときに、衝撃を受けてからです。本研究は、教会史研究という表題にあるように、日本におけるキリスト教受容の歴史を教会の問題として把握し、各個別の教会を実態調査して、信徒・財政構造・信徒形態のあり方を明らかにしたところに今までにない研究だったからです。

ところが、日本プロテスタント史研究会が2007年4月28日の例会をもって幕を閉じたのです。この研究会は、1950年に小澤三郎先生が富士見町教会で研究会を始め、その後高橋昌郎先生が世話人を引き継いだのが、後継者に恵まれず589回で終了しました。その時、横浜プロテスタント史研究会に参加する方がいるのではないかと考えて、高橋先生から「日プロ研」の名簿（約70名）を頂き、「横プロ研」の案内を出したところ、何人かの方が出席されるようになりました。大濱先生は、この時から「横プロ研」に参加するようになったのではなく、当研究会の発足当時から注目して出席はできませんでしたが、会員となっていました。

大濱先生は、よく電話してくることがありました。小生がキリスト教史学会の庶務理事を昨年までその任に就いていましたので、学会のこと、当研究会のこと、今度こういう本が出るので取り上げて欲しいとか電話がありました。先生は、札幌に住んでいましたので、研究会で発表して頂こうと思っても、交通費代が掛かるので、呼べないでいましたが、そのことを伝えると、月に1回女子学院で特別講座をしているので、それに関係すれば、交通費はいらぬと言って下さり、それに甘えて、昨年1月20日の例会において、「日本プロテスタント史研究の現状と課題」というテーマで講演会を開催させて頂きました。なお大濱先生の講演内容が、当研究会No.63号（2018年9月号）に掲載されていますので、見て頂きたいと思います。ここでは、当研究会例会案内399回の例会報告を掲載させて頂きます。

「日本プロテスタント史研究の現状と課題」

大濱先生の講演要旨（2018年1月20日横浜プロテスタント史研究会の例会案内の報告から）。まず、I. では歴史を問い質す場ということで一視点をどのように設定するかという問題提起をした。「日本プロテスタント史は、過度なる神学的課題意識によ

りそうことで、『現代の自己の利害から歴史に注文をつける』作法で、自己の信仰・思想体系—イデオロギーに合わせて、『歴史的倉庫から何かを勝手に取り出す』『歴史との取引』で、『福音信仰』の証としての歴史を描いてきた」ところがある。それは、共産党の党史的発想と同根であるという。

II. 研究の軌跡では、戦後から今日までの日本プロテスタント史研究の動向を解説、小澤三郎、隅谷三喜男、工藤英一、森岡清美、鈴木範久、大濱徹也の各氏の研究をあとづけた。III. 日本近代をどのように理解するか。IV. 日本のキリスト者はどのような存在だったか。V. 教会アーカイブスへの眼。

これらの項目を通して、強調されたことは資料、文献を読み込むことが重要で、そうした資料に基づいた緻密な研究が大切で、自分勝手なドグマで歴史をあとづけては、真の研究にはならない。個別的な地域の教会の資料を通して、教会の視点を大切にしていきたい。もう一度、戦後から今日までの日本プロテスタント史研究を丹念に読み直す必要があり、短絡的に批判、断罪するのではなく、追体験の歴史を大切にすることだという。例えば、鈴木範久氏が『聖書の日本語』を叙述しているが、日本人がどのように聖書を読んだかという追体験の視点から書いたものである。またなぜ、日本でヴェーバーが読まれるのかを考えると大塚久雄、隅谷三喜男等はマルクスの原書を読むことができない時代状況の中で、ヴェーバーを通してマルクス研究をしたという実態があると述べた（出席者33名）。終了後、懇親会を行ない交わりを深めた（約15名出席）。（K.O.）

【編集後記】

会報66号をお送りします。私たちの研究会に参加されていました大濱先生が突然逝去されました。ぽっかりと穴が開いた感が強いです。2019年4月3日（水）、女子学院の講堂で「大濱徹也先生を偲ぶ会」（写真はこの会で写し出されたものを使用）が行なわれました。先生の威徳を忍ぶ形で、先生と御縁があった方々が集まって、思い出を語る会がありました。ご家族のうえに主の慰めが豊かにありますようにお祈りします。

【訂正】

「横浜プロテスタント史研究会報」の号数をお詫びして訂正します。2018年9月22日に発行した会報を63号としましたが、64号に訂正。また同年12月15日に発行した会報64号を65号に訂正します。（K.O.）